けり。

（言　海）

れんじやく（連着）

一　レンジヤク

谷川士清　れんじやく　『江次第』に連着鞦あり。或は連蒻に作る。（編者いふ、太平記巻三九（芳賀兵衛入道軍事）に「連蒻ノ鞦」とあり。）『説文』に「蒻ハ蒲子可以爲平席」と見えたり。商人の肩に掛る物をいふは一書に歛債とかけり。（編者いふ、一書とは合類大節用集をいへるにはあらざるか。同書（七の一六丁）に「歛債（レンジヤク）・連蒻（同）」と見えたり。但し肩に掛る物をいへるか。鞦の一種をいへるか詳ならず。連蒻と並べ擧げたるによりて考ふれば鞦をいへるが如し。）連着より出たるなるべし。

（倭　訓　栞）

二　大槻文彦　れんじやく　連尺。　連着かとも云。　物を負ふに用ゐる具。二片の板に繩を繫け背に付く。

高橋五郎の『いろは辭典』にも『れんじやく　歛債・連尺・連着　物を脊負ふに用ふる繩』とあり。

二　レンヂヤク

喜多村信節　れんぢやくといふ猿樂狂言に、「目代この所御ふつきに付新市をたていとの御事故高札をあぐる是に打まうせう女わらはゝ此邊にひとり住ゐして酒をうる者じやこの處御ふつき故しん市がたちまうする一のたなをりやうしたらばすゑ〳〵までつけてくだされうと仰せらるゝわらは一の店をもちましやうと思ふてまだ夜の内にでた參る程に市場じや是が一のたなじや是にしませう云々」

狂言には「柿賣」「かつこ」「炮烙」等に、多く新市一の店などのことあれども、此れんぢやくには故あり。物を背負ふ具をレンヂヤクといふ。今是を連雀と書は鳥の名にし

て、器物にあらず。『下學集』増補に連着と書るがよし。レンジャクは假字たがへり。すべて何によらず、負ひ又は荷ひてありく商人をレンヂャクと云し事と見えたり。天正廿年十月晦日町年寄三人へ賜りし御書付に連着町とあり。

（嬉遊笑覽存採叢書本二〇の二丁）

落合直文の『ことばの泉』に『れんぢやく　連着。（一）物を荷ふときに用ゐる具。……（二）轉じて、物を荷ひて賣りあるく商人』といへり。

參考

伊勢貞丈の『貞丈雜記』（一三の三五丁）に『れんぢやく鞦と云は、大ぶさ小ぶさの惣名也。『延喜式』（彈正式）曰「凡六位以下鞍鞦總不レ得ニ連着一但聽レ著ニ鞦衢及後末ニ云々」

此心は延喜年中の法に、六位以下は鞦の總を並べつらねて付たるをば、用る事をゆるされず。但鞦の辻の所と鞦の端とに總を付る事をば、御免被成と也。鞦の辻とは、くみちがへの所を云也。連着の二字をレンヂャクとよみて、總をいくつもならべつらねて着る也。此連着に大ぶさ小ぶさの兩品あり。大ぶさを厚ぶさとも云也。『錺抄』曰「古鞦チイサク總短近代鞦甚大總長云々」然らば上古は小總にて、其後大總は出來たる物也。又鞦の辻にばかりふさ付たるをば辻總といふ也。『桃華藥葉』に連着小總辻總と見えたり。『延喜式』に着ニ鞦衢一とあるは此事也』といへり。

なほ『古今要覽稿』（國書刊行會本第二の六九五頁）には連着鞦の圖をいだしたり。

ろうたし（ろうくしの條參照）

ラウタシ

一源光行　『河海抄』國文注釋全書本、二七三頁に『おもむけ給けしきいとらうあり　勞　水原抄』とあり。

古き抄物大かたこの説によりて勞の音とせるが如し。さてその意義につきては、

『岷江入楚』國文注釋全書本上の五二頁に、三條實枝の説とて、『勞也。あまりうつくしうたを〳〵としたる人は、いたはしくおもはるゝこゝろなり。我心を勞して人に懇にする心也』といふ説をあげたり。伊勢貞丈が『安齋隨筆』故實叢書本卷五の一七二頁に、『ラウは勞の字なり。イタハルとよむ。婦女の形の美麗なるを愛して、我心を勞すべき樣に思ふを云ふなり』とあるも同意の説なるべし。

五井純禎は『源語梯』中の二五丁に、『らうたげ　うつくしうてよわ〳〵とみゆるなり。……ラウは勞の字なるべし。勞すればくたびてよわきもの也。およそうるはしきものはこは〳〵しくはなきもの也』と説きたり。

山岡俊明が『類聚名物考』第四册の五五九頁に、『らうたげ　勞々しき氣色をいふ。勞は煩勞などいひてわづらはしなどよみたれば、物を思ひしみ引入たる女などの、さはやかならず病惱の有りさまなるにたとへていふなり』といひ、萩原廣道が『源氏物語々釋』一の九丁に、『らうたしは勞痛の意にて、苦勞の多く甚しきを見ては、きのどくに思ふ意より出たる語也。さてそのきのどくに見ゆるものは、憐(アハレ)のかゝるものなる故に、轉りてはかはゆくあいらしき意にもなれるなり』といへるもほゞ純禎と同意の説なるが如し。

また、鈴木　脹の『雅語譯解』にも『勞いたし歟』といひ、大槻文彥の『言海』にも『勞甚しの約と云』とあるは、我心の勞多き意か。人の勞多き意にか明ならず。

二素寂　『紫明抄』內閣本、天の二〇丁に『らうたき　良也』と

注せり。

此の他、契沖の『源註拾遺』國文注釋全書本、三〇頁　賀茂眞淵の『源氏物語新釋』本居宣長の『玉の小櫛』全集第五の一二五七頁　共にラウと書し、石川雅望の『雅言集覽』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『ことばの泉』笹村良昌の『假名の栞』またラウの假名遣とせり。

二　ラフタシ

四辻善成　『河海抄』國文注釋全書本、二七三頁「おもむけ給けしき　いとらうあり」といへる語の解に、『案之蔦ある歟。上蔦しき體也。ラウラウシキともラウタキともいへる同事也』とあり。

但し『同書』一八頁　ららたくの解に、『勞・良・亮日本紀ほけ〳〵としたる心なり』『同書』一〇三頁　ららたけにの注に『勞・亮日本紀』とあるは疑はし。或は、蔦の意なると勞・亮・良等の意なるとありて、別語とせるか。然らば假名遣またラフ・ラウの別あるべし。

谷川士清も『倭訓栞』に、『ららたし　勞字なりといへり。いたはり惜む意にいへりとぞ。されどららたげとも見えたれば、蔦のたけたる意にいへる成るべし。ららたうといへるも同じ。されば、ラフと書くべし』といへり。

ろうろうし

（ろうたしの條參照）

一　ラウラウシ

五井純禎　ららうし　ららたきに同じ。

（源語梯　中の二六丁）

本居宣長は『玉の小櫛』全集第五の一二五七頁　に『ららたげな

りしを　此詞は俗にアイラシキといふ意なり。さてついてにいはむ。らうたしとらう〳〵しとは其意いたくことなるを、詞のさまのよく似たる故に、あひ誤る人有。らう〳〵しは俗にいふ物の功者なる意なり」といへり。

二　鈴木朖　ららうしは、功者ナ・コウノイツタタチ。ラウは本勞なり。勞は仕官の年功のことなり。（雅語譯解）

萩原廣道が『源氏物語々釋』一の九丁に「らう〳〵しは勞々しの意なり。これは功勞の勞にて、功勞をつみたるものは何事にも功者なる意に轉じたる也」といへる、また同意なり。

大槻文彥（言海）　物集高見（日本大辭林）　落合直文（ことばの泉）等また、勞々の義とし功者と解せり。

三　石川雅望　勞々シ・良々シの二意に解せるが如し。

『雅言集覽』らう〳〵しの條に、「らう〳〵し　功者・ヨキキマヘ・ヨキ形」○らうたげとはことなり。俗に物の功者なる意なり。勞々し也。『枕草子』七ノ廿四。人のなぞ〳〵合せし所に、「かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵じかりけるが」○これら功者ともいふべし。……『源氏物語』幻。六。紫の死うせ玉ひし後、中將を御覽じ玉所に、「心ばせかたちなどもめやすくて、うなゐまつにおぼえたるけはひ、たゞならましよりは、ららうしとおもほす」○これら功者なることにてはなし」といひ、

更にらう〳〵しくの條に、『源氏物語』『紫式部日記』『空穗物語』『枕草子』『狹衣物語』等の例を多く擧げ、『源氏物語』初音。二。「少しおとなびたるかぎり、中〳〵よし〳〵しく」とあるは、ラウ〳〵シキを訓にていへるなり。『枕草子』二ノ一七。心ゆく物。「小舍人はちひさくて、髮のうるはしきが、すそさはらかに聲をかしうて、かしこまりて物など云たるぞりやう〳〵しき」○此枕草子に「リヤウ〳〵シキとあり。『源氏物語』葵に「心ばへらう〳〵

ろうろうし

し」とあるをおもへば、よし〳〵しきといふことにて、功者なることもこもるか』といひ、

また『源氏物語』末つむ。一二。「らう〳〵しうかどめきたる心はなきなめり。いとこめかしうおほどかならんこそらうたくはあるべけれ」『空穗物語』藏びらき。下ノ四十九「顔かたちきようなれば、あてにらう〳〵しき人といへど、あばれたる所にかすかなるすまひなどして」その他多くの例をあげて、『良々しく也。功者なることにはあらず』といへり。編者いふ、この良々の説は北村季吟の枕草子春曙抄（二の一七丁）りやう〳〵しきの注に「良々也」とあると、下に引ける河海抄の注とに據れるなるべし。

近藤眞琴も『ことはのその』にラウラウの假名遣とし勞々・良々の二義とせり。

四　清水濱臣　老々しくなり。よろづの事に功者なるをいふなり。

（源氏物語新釋賀茂眞淵全集第四の三七三二頁）

二　ラフラフシ

四辻善成　『河海抄』國文注釋全書本、一二九頁「ちかき世にとのみなんらう〳〵しく」の注に『良々・亮々日本紀　案之りやうりやうしきにはかはるべき歟。是は上藹しき心也。藹々也』とあり。同書（二〇六頁）「もていでゝらう〳〵しう」の解に、「良々・亮々。（日本紀）りやう〳〵しき詞也。せいのちいさきなどを、りやうりやうしきと云。非其儀稱美詞也」とあり。これを以て考ふれば、良々或は亮々の意なるろう〳〵しと藹々の意なるろう〳〵しと二つありて別語なりといふ説なるか。さらば假名遣もラフ・ラウの二樣となるべし。猶ろうたしの條を參照すべし。

賀茂眞淵の『源氏物語新釋』全集第四の三七三二頁に『ららうしくは藹々にて上らうしきなり』といひ、

谷川士清も『倭訓栞』らふたけての條に、『藹長ての義なるべし。らふ〳〵しきも藹々しき義なるにや』といへり。

わかんどうり（王孫）

一　ワカンドウリ

一　素寂　わかむとおりの日や　王家無等倫也。皇孫云。我無等倫。『法華經』化城喩品「世雄无等倫」

（紫明抄内閣本、天の四五丁）

『弘安源氏論議』經濟雜誌社本、羣書類從第一一輯の四三〇頁　に、「親行が釋する處の王家無二等倫一。『史記』殷本紀に、王家をおさむといへり。『法華經』化城喩品に、「世雄無二等倫一」といふことあり。かの大史公がかしこきあとをひき、この一乘經の妙なる詞を引合て釋せり」　とあり。

行阿の『原中最秘抄』經濟雜誌社本、羣書類從第一一輯の三九六頁　四辻善成の『河海抄』國文注釋全書本八四頁　をはじめ、古き『源氏』の注釋書大かた此の說によれり。

伊勢貞丈も『安齋隨筆』帝國圖書館本一九の六六丁　に　「王家無等倫と書て、天子の御血筋をうけたる王孫の人々を云也。わかんどうり（王孫）

ワカントウリ也。トヲリと書は誤りなり」　といへり。

二　『俚言集覽』愚按　王家無等倫・和漢通・王家通等の說をあげて、「等倫ならばトウリの假字。通ならばトホリの假字なり。混ずべからず。……按、無等倫の字はいかが。近世、王家統理の字を用ゐたる方よろしかるべし。『和訓栞』の和漢通といへるは『河海』の一說より出たる說にて信用しがたし」　といへり。源註拾遺・源氏物語新釋にも王家通の說を河海抄に見えたるがごとく注したり。されど國文注釋全書本を檢するにいまだ見當らず

二　ワカントホリ

一　或人の說　『原中最秘抄』經濟雜誌社本、羣書類從第一一輯の三九六頁　に、「或說云、和漢に通たる達者の事也」　とあり。

行阿は「此義不レ可レ用レ之」　とてこれを斥け、谷川士清は此の說を用ゐたるなるべし。『倭訓栞』に　「わかんとほり　『源氏』に多くいへり。和漢通の義也。又

「猶ざえを本としてこそやさと玉ひの世に用ゐらるゝ事もつよう侍らめ」（編者いふ、源氏物語少女の巻に見えたり。）といへるも此意なり。源順文に「賢太夫之心通二和漢一者」といひ、『八雲御抄』に「和漢家」『東鑑』に「可下令レ好二和漢才一給上」『神皇正統記』に「和漢才覺」と見えたる同義なるべし』といへり。

二　契沖　わかむとほり　王家無等倫の義物に見えたる證なくばあたるべしともみえず。もし其義ならば又ムの字ははねずしてムトホリと下へ付てよむべき理也。百濟王禪廣の末を、百濟王某乙（ソレガシ）といひけるを略して、王といひければ王家（ワカ）といふべし。さてそれを音便にワカンともいふべきは、催馬樂に「わいへん（我家）」などいふ例也。トホリすぢの心にて、王家の裔といふ心などにや。

『延喜式』に中納言眞世王の末を王氏といへり。又桓武天皇の御裔にもいへり。いづれの親王にもあれ氏を賜はらてあるほどは皆王氏といふにや。王氏を王家といふべし。（源註拾遺拾遺國文注釋全書本三四頁）

賀茂眞淵の『源氏物語新釋』（全集第五の四六二五頁）加茂季鷹の『正誤かなつかひ』の説また同じ。萩原廣道も『源氏物語評釋』（六の二丁）に、『拾遺』の説のごとく王家のすぢといふ義なるべし』といへり。

また山岡俊明が『類聚名物考』（第三册の一四八頁）に『或は王家無等倫といふ説もあれども、あまりにくだくしければ、その頃の人の聲口とも思はれず。ワカはいかにも王家なるべし。ムドホリは嫡統あるは統通の意にて、音便によてム字はそへていふなるべし』といへるも、大體は同説なり。

三　伴信友　わかんどほり　信按、若御裔なるべし。其は『字鏡集』に裔字をトホリ・ハツコ・ハツムマコとよめ

『北史倭傳』に「名ニ太子一爲ニ和歌彌多弗利一」（ワカミタフリ）と云へる、ワカミドホリを漢人のしか聞なしたる也。弗はホッ音なればホに用たるにてもあるべし。多は全浙兵制の『日本風土記』にトの音に用ゐたり。

さて『北史』通本、「利歌彌多弗利」とある利を、古唐本に和とありと或人のいへり。編者いふ、藤井貞幹の好古日錄（下の六一丁）に見えたり。必それ正しかるべし。

（増補語林倭訓栞）

石川雅望も『雅言集覽』に、『わかんどほり』『北史』倭國列傳、「王妻姓雞彌沒官有女六七百人名太子爲利歌彌多弗利」とあり。或人の云、古本の北史には利を和文字にかけりといへり。今の本は誤れるなるべし。しからば王孫をさしていへること、古き時よりのことなりとしらる。又考るに若皇子（ワカミコ）ドホリを略せるにて、トホリは筋といへる心なるべき歟。』といへり。

此の他、大槻文彥の『言海』には、『ワカンは大上（オホカミ）の約轉か、……トホリは系（スヂノ）意と云』と注し、近藤眞琴の『ことはのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』等またトホリの假名遣とせり。

われもこう（草の名）

ワレモカウ

一　荻生徂徠　きく・きちかう・しをに・われもこう、皆漢語也。レは助語にて和木香といふ事にや。

（南留別志卷二の一一丁）

林　道春の『多識編』二の六丁に『木香。　左宇毛久左。又和禮毛加宇。異名、密香（ミッカウ）。青木香（セイ）。五木香（コ）。南木香（ナン）』とあり。

二　加茂季鷹　われもかう　草名。眞字未考。　破帽額歟。

（正誤かな遣）

大槻文彦も『言海』に『われもかう　割帽額（ワレモカウ）（紋）の義にて葉の形よりいふか』といへり。

村田春海は『若桂』一七丁に、季鷹の説を駁して『此假字正しき證もなく、草もたしかにしりがたし。世の物産の學をなす人は、地楡の事也といへど、さしたる證もなし。此書に破帽額かといへるは、詞の釋と見ゆれど、破帽額といふ事、何のことわりも分ちがたし。もかうは草にたとふべき形の物にもあらず。いかなる心にてかゝる事をばいふらん』といへり。

三　屋代弘賢

『古今要覽稿』國書刊行會本第五の二三九頁に『源氏物語』匂ふ宮なる「秋はよの人のめづる女郎花、さをしかのつまにすめる萩の露にも、をさ〳〵御心うつし給はず。老をわするゝきく、おとろへ行くふぢばかま、ものげなきわれもかう などは、いとすさまじき霜がれの比ほひまで、覺しすてずなどわざとめきて、かにめづるおもひをなむたてゝこのましうおはしける」の文を引きて、『弘賢曰、よき香ある草をのみめでゝ、香をりなき花には心うつさずといふ香草のうちにワレモカウをかぞへ入たれば、茅の類、ならびに地楡・蒼求ともにかなはず。麝草のみ香氣あれど、「ものげなき」といふにかなはず。されば茅香なるべしといへり。茅香は「ものげなき」といふにもかなひ、「霜がれの比ほひまでおぼしすてず、わざとがましきまで香にめづるおもひをなんたてゝこのましく」といへるによくかなへり。そのゆゑは、生草にても香氣愛すべく、乾草にても浴湯香・印香・諸供養香等に用ること、『薫集類抄』にみえたり』といひ、

また『狭衣物語』三の中に、「からぞめの御ぞどもに、あをきこきうすきわれものおりもの奉りたるも、いとゞにほひなくすさまじき心ちしたるにも……むさしのゝ霜がれにみしわれもかう秋しもをごるにほひ成けり……ひとりごとさへくちふたがりぬるを、なほいとわびしうおもひあま

り給ひて、冬ふかき霜がれの雪のあしたこそ、この色はをかしけれ。この比はあまりおとなしくこそ有けれとの給ふ」とあるを引きて、

『弘賢曰、これは一品宮の衣服を、狹衣の評し給ふなり。歌のまへに「ありし雪のあしたに、齋院のかれのがさねたてまつりし御ねぐたれすがたぞおもひ出られ給ふ。はなやかなる色あひよりも、めづらしくもみえしかなとまづおもひいでられ給ふ」とありて、心に齋院よりもこの宮おとり給ふとおぼすなり。われもかうは芳草なるを、「にほひなくすさまじく」とおぼせしは、あまりたかぶり給ふ心ばへをさして、「にほひなくすさまじ」とにや。さればこそ歌に「秋しもをごるにほひなりけり」とよまれしなり。編者いふ、流布本には、をとるとあるを、花鳥餘情によりてをこると改めしなり。……此草は秋さかりなるものなり。さて常は其時節の物を相應にすめれど、こゝはその人がらにあはせて、あまりなることゝおもはるゝゆゑ、「この

われもこう（草の名）

比はあまりおとなしくこそ」との給ふなり。おとなしくとはおとりたるといふ義なり』といひ、

また『十寸鏡』草枕に、「院はわれもかうみだれおりたるかれのの御狩衣、うすいろの御ぞ、紫苑色の御さしぬき」とあるを引きて、『弘賢云、「みだれおりたる」といへる茅香のさまあきらかなり。これによればこの比まではまぎらはしきことあらざるにや』とて、今世、茅の類・地楡・蒼求・麝草の四種をいへど、皆誤にして茅香なりとし、さてその名義を釋きて、

『ワレモカウは和名にあらず。その證は、『本草和名』及び『和名類聚鈔』等にみえず。『古今和歌六帖』等にものせず。よりて按ずるに、モカウとは茅香の轉ぜしにて、ワレとはワラ〳〵としたる形故、ワラの轉語なるべし。『八雲御抄』に忘草を「わら〳〵と有」と記させ給ひしぞ思合せらる。「閩人呼茅如麻」といふこと『本草綱目』茅香の條

われもこう（草の名）

下にみえたれば、唐土にも似たること有なり』といへり。

清水濱臣の『語林類葉』には、『久安百首』なる季道の歌「野邊ごとに人もゆるさぬわれもかうこや今夜のむさのことくさ」また安藝のよめる「なけやなけをばなかれ葉のきりぐすわれもかうこそ秋は惜けれ」といへる歌などを引きて、カウの假名とせり。

石川雅望も『雅言集覽』に『久安百首』なる季通の歌をあげて、ワレモカウとせり。

この他、近藤眞琴の『ことばのその』物集高見の『日本大辭林』落合直文の『詞の泉』笹村良昌の『假字の栞』またカウの假名遣とせり。

疑問假名遣　前編（學說の部）終

日本
神田

大正元年九月十七日印刷
大正元年九月二十日發行

疑問假名遣　前編　學說の部
定價金壹圓六拾錢

文部省內
編纂者　國語調査委員會

發行者　東京市日本橋區新右衞門町十六番地
株式會社　國定教科書共同販賣所
右代表者　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地
株式會社　秀英舍

發行所　東京市日本橋區新右衞門町
株式會社　國定教科書共同販賣所

文部省著作權所有

國語調査委員會御編纂圖書目錄

書名	冊數	定價	郵稅
片假名平假名讀ミ書キノ難易ニ關スル實驗報告	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
國語改良論說年表	全一冊	金貳拾錢	金四錢
方言採集簿	全一冊	金貳拾五錢	金六錢
音韻調査報告書	全一冊	金貳圓	金貳拾錢
音韻分布圖	全廿九枚		
現行普通文法改定案調査報告ノ一	全一冊	金貳拾五錢	金四錢
口語法調査報告書	全二冊	金貳圓	金拾六錢
口語法分布圖	全卅七枚	金壹圓五拾錢	金拾貳錢
送假名法	全一冊	金八錢	金貳錢
漢字要覽	全一冊	金參拾五錢	金六錢
假名遣及假名字體沿革史料	全一冊	金參圓	金拾六錢
口語體書簡文に關する調査報告	全一冊	金四拾五錢	金八錢
假名源流考	帙入 全二冊	金貳圓貳拾五錢	金貳拾四錢
平假名源流考證本寫眞	全一冊	金貳圓五拾錢	金拾六錢
疑問假名遣前編（學說之部）	全一冊	金壹圓六拾錢	金拾貳錢

日本
神田

904.

1245

1-1:KW
~~3.334.2~~
2.47.C
1

国立国語研究所
1000606515

日本書房
神田 三崎町

疑問假名遣正誤

頁	段	行	誤	正
四	上	四	拾遺集	拾遺集
四	上	一一	」	」
四	下	一二	」。	」
九	上	四	注し。	注し、
九	下	一四	」。	」
一〇	上	四	いとあひなし	いとあひなし
一四	下	五	」。	」
一五	上	九	源注拾遺	源註拾遺
一五	上	三	源注拾遺	源註拾遺
一五	下	七	源注拾遺	源註拾遺
一六	上	一五	假名拾要	假字拾要
二三	下	七	いへるなむ	いへるならむ
三七	上	九	當代（アテカヒ）	當代（アテカヒ）
四四	上	一四	一 萩原廣道	萩原廣道
四七	下	八	一 貝原篤信	貝原篤信
五四	下	三	一三一頁	一二九頁
六五	上	一〇	うづ	うず
六九	下	一一	（已上字焉）	已上字焉
八三	下	一二	」	「
八三	下	一三	」	」
八五	下	一一	順按……也	順按——也
一一三	下	一四	見べし	見るべし
一二一	下	八	賀茂眞淵	一 賀茂眞淵
一二二	下	六	字受賣命	字受賣命
一二五	上	九	「源順集』	『源順集』
一二八	上	一四	政事要路	政事要略
一三五	上	四	假名拾要	假字拾要
一三七	下	六	假名拾要	假字拾要
一八四	上	一	若葉	若菜
一八七	下	一二	拾遺集	拾遺集
一九二	上	一二	假名拾要	假字拾要
二〇七	下	六	づゞけたる	つゞけたる
二〇八	上	六	逢ふせありや	逢ふせありやと
二〇八	下	四	古言梯標注	古言梯標註
二一二	上	六	假名拾要	假字拾要
二一八	下	七	朱綬	朱綬
二二〇	下	四	オトドエ	オトトエ
二二一	上	四	落合直文	鹿持雅澄の『萬葉集古義』活版本卷一落合直文
二二一	下	八	ことばその	ことばのその
二三八	下	三	おめく	をめく
二四二	下	三	假名拾要	假字拾要
二四四	下	四	國文注釋全集	國文注釋全書
二五〇	上	四	從ひがたく	從ひがたし
二六六	上	一	二	三
二六七	上	一五	三	四
三一二	上	四	剿中記	鄴中記
三八三	上	一二	岡本保孝	小山田與清
三九三	下	五	（陽炎。古へか	（陽炎。古へか
四四〇	下	一二	活字本	活版本
四九四	下	一一	『ひづむ	ひづむ